

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究の目的は、身体教育によって育成する間身体性とは何かを解明し、その間身体性の育成が道德性の礎となることを示すことである。本研究は、体育における道德性という問題を背景に、自己-他者のかかわりを、他者に対する身体の働きの問題として捉え直し、その働きの構造を解明することによって、その働きが道德性の根拠となることについて考察している。現代において危機的状況にある自己-他者のかかわりを、身体の問題として捉えようとするこの試みは、これまでの体育学においては検討されておらず、関係論の研究として独創性を有している。特に本研究では、身体教育によって間身体性が育成されることを明示したこと、さらにその間身体性の育成を道德性の礎として捉えようとする点に、大きな独創性が認められる。本研究によって提示された「身体教育によって育成する間身体性」という新たな視点は、体育学のみならず道德教育の分野に不可欠であり、学校における体育や道德の授業にとっても大きな意義を有すると言えよう。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は、現象学的立場から考察・分析を行っている。本研究における現象学的立場とは、身体運動を実践する主体が経験している「身体運動そのもの（事象そのもの）」へ立ち返り、その構造と意味を探ろうとすることである。本研究の前半部では間主観性や間身体性といった現象学の用語や体育学独自の問題に対して文献中心の検討を行っているが、この立場は本研究全体に貫かれている。特に、第5章では、諸分野の研究方法を吟味したうえで、体育学に独自の現象学的方法として「間身体的アプローチ」を提案しており、6つの観点から示されたこの方法は、他者の身体運動を的確に論じるために、必要かつ妥当なものとなっている。したがって、本研究は、厳密な意味での現象学的方法のみでなく、現象学に関わる文献あるいは教育学や体育学に関わる文献等の考察をも含む複合的・総合的分析方法が採用されている。このことは考察・分析結果を補強しその妥当性を確保するために、体育・スポーツ哲学領域における研究方法として適切かつ妥当なものと言えよう。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

第1章から第5章までは、哲学および現象学、心理学、教育学、体育学に関わる文献の検討を中心に考察されているが、各章のテーマに関連する文献は広範に収集され、かつ正確な読解がなされ、それら文献について丁寧に考察・検討されている。そのことによって各章の論旨が明解になっていると言えよう。また第6章および第7章においては、第5章で提示された間身体的アプローチが適用され、体育やスポーツ実践における具体的な自己-他者のかかわりが分析されている。その分析には、方法としての6つの観点が適切に使用されており、それによって分析対象となる他者の身体運動から妥当性を伴った身体の働きが抽出されている。また、その分析結果を補強するための文献の引用の仕方も適切である。以上によって、本研究の妥当性と客観性は確保されていると言えよう。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究の現象学的な複合的・総合的分析方法は、「身体教育によって育成する間身体性」という新たな視点を提示するために不可欠であり、その方法が本研究の考察とその論理展開に妥当性を与えている。考察は以下の通りである。体育学として論ずべき間身体性の問題は、他者の身体運動に対する認識を問題としており、それは間身体的アプローチによって分析される。その分析から、「身体教育によって育成する間身体性」は、具体的な他者および抽象的な他者に対する間身体性が保持している身体の働きが、「身体的な感じ」を材料にしながら、構造としての稼働によって豊かに育成されることが明らかになる。その育成が、他者に対して「われわれ」という認識を「身体的な感じ」として捉えることを可能にさせる。そのことが道德性の礎となると結論づけている。これらの考察は論理展開を含め緻密である。付言すれば、本論文は査読付き論文ならびに国際学会での発表を経て構成されている。以上により、本研究の考察・結論は妥当であり、学術的な水準に達していると判断される。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究は、危機的状況に陥っている現代の自己-他者のかかわりの問題を、身体運動を行う実践者という身体の立場から明らかにしている。これまで心理学をはじめ教育学や体育学は、このかかわりの問題を心の問題として論じてきた。本研究においてはその自己-他者のかかわりの問題を、単なる他者に対する心の持ち様やあり方の問題としてではなく、他者に対する身体の働きすなわち「間身体性の問題」として捉え、この間身体性の視点が人間にとってもっとも根源的な道德性の礎となることが示唆された。このことは、哲学や教育学のみならず人文諸科学全体にとって大きな意義を有しており、これまでの道德教育のあり方を捉え直す重要な論点を提出したことになるであろう。

本研究によって提示された「身体教育によって育成する間身体性」は、自己-他者のかかわりの土台であり、その間身体性は道德性の礎として働くものである。この考察は、体育学や教育学にとどまらず人間の関係論にかかわるすべての分野の議論に多くの示唆を与えるものである。よって、本研究論文は連合学校教育学研究科の趣旨に合致した内容であり、博士（教育学）の学位に相応しい意義と研究の成果が認められる。